

Title	<紹介> 岩崎佳枝著『職人歌合』
Author(s)	山本, 唯一
Citation	詞林. 1988, 3, p. 62-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67254
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『職人歌合』が平凡社選書の一つとして刊行された。「職人歌合」という語は一般には余り馴染みがないかも知れない。これは多く月・恋を題として職人たちが詠んだ歌を判者が判をなしたとの体裁をとる、中世歌合作品の一群をいう。しかもこの種の歌合には絵が伴なう。働いている職人の姿絵である。工具や商品も描かれる。實際歌を詠んだのは上層貴族たちであろうが、絵と文学から成っているこれらの作品は中世職人の実態を知るに欠かせない貴重な資料である。その上、中世文学の一面を物語る重要な作品群である。今日まで美術史家・歴史学者などで注目する人はいたが、歌や判詞が難解なせいか、充分利用されてきたとは言いがたい。国文学の側からは単なる遊戯文学として片付けられていた嫌いが無いではない。本書は、このような分野へ新しい視点と方法をもって迫った意欲的な書であり、斬新な内容に富む研究の書である。達意の文で書かれている本書によって、我々は職人歌合の世界を知ることが出来るであろう。目次をまず挙げておこう。

第一章 「職人歌合」の魅力

第二章 「職人歌合」の成立

第三章 「職人歌合」の世界

- 一 「職人歌合」の水源地『東北院職人歌合』
 - 二 辛酉の年の歌合―『鶴岡放生会職人歌合』
 - 三 維摩経と水無瀬神―『三十二番職人歌合』
 - 四 『白氏文集』と代替り―『七十一番職人歌合』
- 一 一番いとなる「職人」たち
 - 二 異色の「職人」群像
 - 三 画中詞に見える「職人」たち
 - 四 「職人」の土地

第四章 「職人歌合」の文学性

第一章は総論というべきものであろう。職人歌合の歌と絵の魅力について述べる。とともになぜ職人歌合が制作されたかという問題を提起し、それに関連して歌合が詠作された場所・時期から考えて、著者は職人歌合を結縁と鎮魂の二重の意味での法楽の文学とする。第二章以下は各論であり詳論である。『東北院職人歌合』は職人歌合を仏道に結縁させるための文学と考える。詠作者として、職人を愛した後鳥羽院などを想定する。『鶴岡放生会職人歌合』は鎌倉での作品である。序文に見える、

親王將軍の鶴岡八幡宮への行粧が格別盛大であったという点に着目し成立の年時を弘長元年と推定する。鎌倉歌壇の最隆盛期であり、かつ世情不安を思わせる辛酉の年であったのである。

上記の二作品のあと約二百年をへだてて室町時代、戦国に突入した時点でまた職人歌合が作られる。『三十二番職人歌合』は判詞に見える流行仏・谷観音の記事を手掛かりに著者は日記類を精査して明応三年の制作と論定される。『七十一番職人歌合』も近衛殿に関する記事等から明応九年の作と推定されるのである。歌合の構成については「三十二番」と「維摩経」との関係論じ、「七十一番」には明らかに『白氏文集』（七十一巻本）の影響があるのだとされる。また歌の詠者に関して、三条西実隆や飛鳥井雅康らの詠歌が歌合に含まれていることを資料をもって示される。これらは全く新しい発見であり指摘である。第三章では職人たちの職能と時代によるその変化とを考察する。「画中詞」を取り上げている章段は当時の職人はたちの生活と心情を生き生きと描出して読み物としても面白い。第四章は歌合の歌の文学的性格の考察である。職人歌合は月・恋を題とする点で雅びを志向しつつ世俗的な職人世界をも詠まねばならない。『七十一番職人歌合』の場合は概ね職人語を上句に詠み入れ、月や恋のことを下句におく。俗を雅びでつつみ、雅の文学としようとしている。判者たちも同じ意識をもっていったという。本書には、最後に職人歌合の諸本の研究が添えられている。

著者は「本書ではひじょうに大胆な仮説を立て、拡大解釈を

行い、推論もあえてしている。いくつかの誤謬を犯していることと思う」と言われる。そういう点があるかも知れない。しかし仮説を立てることに臆病であってはならない。仮説に誤りがあれば、それを乗り越えるところに学問の進展があるのである。未開拓の分野に新しい畝を入れ、多くの収穫を挙げられた著者の努力と業績に対して心から敬意を表するものである。

(一九八七年一二月刊、平凡社、B6版二九九頁、二三〇〇円)

新著紹介

林和比古編著『堺本枕草子』本文文人佳木成』

著者の四十年にわたる堺本枕草子に関する本文の集大成で、本文篇(前篇)、本文篇・諸本解題(後篇)の二冊、一九九四頁からなる大著である。台北大学・静嘉堂・三時知恩寺・吉田幸一・前田尊経閣・山本嘉将・桃園文庫・龍門文庫・河野記念館・田中重太郎・大和文華館・無窮会・多和文庫・群書類従・書陵部・京都大学・河野記念館・彰考館の十八本を三類に分け、すべての本文が見れるように翻刻する。即ち、一頁を十八行に組み、一本の本文を一行ずつとしていく。左右を見ていくことによって、諸本における異同がすぐさま判明する方法をとる。(昭和六十三年二月刊、A5版、私家版、六〇、〇〇〇円)発売所 日本書房(一〇一 東京都千代田区西神田二一八一―二)